

公開講演会記録

映画制作を通じて考えた 東北復興、そして韓国

『一陽来復 Life Goes On』監督 尹美亜



はじめに

人は人とながることで生きていられる生き物なのだ、ということをし、私は東北で被災した方々から教わった。目新しい言葉ではない。けれど地獄のような苦しみを生き抜いた方々の口から聞くと、



まるで初めて聞かされたような衝撃をもって胸に刺さった。

『一陽来復 Life Goes On』（以下、『一陽来復』）というドキュメンタリー映画に監督という立場で参加できたおかげで、私はたくさんの方々と出会い教わった。10か月間で岩手県・宮城県・福島県の3県に通い、取材して完成させた。監督するのも初めて、家族を亡くした方々を密接に取材するのも初めてで手探りの中、一つだけ心にあったのは、被災した方々のためにならなければこの作品を作る意味はない、ということだった。だから決して「外」の人が感情的に消費するかわいそうな話にしてはならない。我々と何ら変わらない隣人の話であり、いつ誰の身に起こるかわからないという点で先人の

話だと思った。可能な限り自然な姿をそのまま伝えられるよう、制作者の存在感をあえて消し去る。それが私の初監督作品の方針だった。

完成した映画を観てくれた東北の出演者や協力してくれた方々の顔は晴れやかで、私は初めて安堵した。そして映画という媒体のエネルギーは制作者の意図をはるかに超えて、映画大国である韓国で劇場公開される運びとなった。震災以降初めて訪れた韓国では、東日本震災イコール福島原発事故以外の何物でもなく、国民感情は想像を超える悪さだった。しかし日韓友好は草の根ではとても良好だという確かな感触を得た。

この映画制作を通じて出会った方々について、映画には描かれなかった思い、



石巻の遠藤伸一さん綾子さん夫婦

そして韓国での公開や、本作を通じて問われた在日韓国人の在り方について記したい。

人は絶望の中でどう生きるか

『一陽来復』には岩手、宮城、福島の手3県から最終的に30名近い方々が出演をしてくださったが、宮城県石巻市で木工の仕事をしている遠藤伸一さんとその妻綾子さんは、最初に決まった出演者であり、もっとも中心的な人物となった。ご夫婦は津波で3人の子ども全員を亡くされた。震災直後は「生きていて地獄」であり「何の色もない世界」だった。何のために生き

ているのかかわらない絶望の中で死なずにいられたのは、目の前に「今日やるべきこと」があったからだという。夫婦がいた

避難所は、津波にのまれながらもなんとか助かった人々が集まって自然発生的にできた避難所で、多くがお年寄りだった。若手だった遠藤夫妻には役割が与えられ、食料や水の調達、トイレの始末、怪我や病気の人の世話など、そこにいる皆が「死なないために」毎日やらなくてはならないことが山積みだった。振り返ってみると、あの夫婦がよからぬことを考えないよう忙しくさせよう、決して一人きりにさせず誰かが傍にしようと、避難所のお年寄りやボランティアがご夫婦のために暗黙裡に実行していたのだと、伸一さんは振り返る。これ以上死者を出さないよう今日1日この避難所にいる皆で生き延びる、それだけに集中することで、最初の数か月が過ぎ去った。

伸一さんが木工の仕事に復帰したのは、あの津波で24歳だった娘を亡くしたアメリカ人夫婦の後押しがきっかけだった。アンディさんとジョーンさん夫妻は、娘のテイラー・アンダーソンさんが生前ALT（外国語指導助手）として英語を教えていた石巻の小中学校に、本棚を寄贈することを考えた。テイラーさんが大好きだった読書を通じて、石巻の子どもたちにチャンスを与える。日米の架け橋になるという娘の遺志を継ぐためだった。そ

してその本棚製作を遠藤伸一さんに依頼した。仕事に復帰する気力の持てない伸一さんは一度は断るものの、アンディさんジョーンさん夫妻の志を知り、そして自らの子どもたちもテイラー先生に習っていたことを綾子さんから聞かされ、本棚を作ることを承諾。そこから仕事に復帰した伸一さんは、8年経った今もアンディさんジョーンさんご夫妻とともに本棚の寄贈を続けている。「亡くなった子が生き証を作る」。それはつらいけれど同時に、残された親が生きる支えにもなる、吊いの行為なのかもしれない。

伸一さんの口から出るのは、あの絶望の中「一人では生き延びることはできなかった」という思い。身近な人から、報道を見て連絡したという遠方の人々まで、多くの人がご夫婦へ様々な申し出をして、時間をともにした。それがつながって、気づいたら何年も時が過ぎていた。「人を救うのは人」だと、亡くなった子どもたちが教えてくれているのかもしれない、と伸一さんは言う。計り知れない涙を流し、悶え、自らの魂を削ってたどり着いたのは、人は人とのつながりの中で生かされている、という理。伸一さんが今生きてそれを伝えてくれていることは、なんと貴いことだろうと、私は毎回身震い

する。人は絶望の中でどう生きるのか、身をもって示してくれている遠藤伸一さん、そして綾子さん。その笑顔に接するとき、私たちは人が背負うものの大きさと、自分が生かされている意味を考えずにはいられない。きっと東北には似たような境遇の方々が大勢いるに違いない。

心の復興とは

復興庁は震災後最初の5年間はインフラ事業に注力、次の5年間は「心の復興」とうたい、その最初の年のプロジェクトの一つに採用されたのがこの映画制作だった。被災された方々のための事業だからこそ、私はこの映画によって被災した方をいかなる形でも傷つけてはならないという思いが特に強かったのかもしれない。補助金の条件は、同一年度内というスケジュールの制限と、岩手・宮城・福島のみで撮影してほしい、ということのみだった。正直「心の復興」という言葉には少し違和感があった。言わんとすることは理解できるのだが、言葉としてあまりに無神経で安易すぎるようにも思えて…。

それでも「心の復興」とはどういうものであろう、という問いを頭の隅に入れながら撮影を進めていった。「時間が解決するとは思えない」「思い出したくない、けれ

ど忘れたくない」「(亡)くなった子の」明日は成人式」というような言葉の数々を聞かせてもらいながら編集室に入り、映画の結論をどうまとめるか、私は悩んだ。「心の復興」の一つの形を提示するべきなのかどうか…。「穏やかな気持ちで話せるようになった」「新しい人生を歩み始めた」など、ありがちな結論なら提示することはできたかもしれない。しかし最終的に私は、答えを出さない結末を選んだ。東北で多くの方に会って、「心の復興なんてものはないんだ」とどこか反発するような思いもあった。

それでも敢えて「心の復興」なるものがあるとしたら、それは状態でなく継続するプロセスのようなものではないだろうか。「復興した」「復興していない」の二項対立ではなくて、「復興したといえる部分」と「決定的に破壊された部分」の共存状態なのだと思う。苦しみや悲しみは決別するものではなく、ともに生きていくものなのだ。人生を破壊するほどの究極の出来事があったら、その後の人生が同じであるはずがない。だから復興というのは、「元通りに戻る」ことが正解なのではなく、起きたことを全部ぶら下げながらも「進化し続ける」ことに希望があるように思う。喪失にきちんと向

き合って、とことん悲しむ。そして弔いながら、人生を再構築する。それが進化することなのではないかと思う。人間にはいざとなればそんな力がある。絶望を生き抜いた方々が教えてくれたのは、そういうことであるように思う。

福島避難区域の農家

映画『一陽来復』にはたくさんの方々が出てくるが、繰り返し出てくるのは、前出の遠藤夫妻ともう1組、福島県川内村の秋元美譽さん、ソノ子さん夫妻だ。

夫妻は震災のあった2011年に、福島の避難区域で田んぼを作った唯一の農家だ。



川内村の遠藤美譽さんソノ子さん夫婦

川内村は福島第一原発から20キロ圏内と30キロ圏内にかかり、震災直後は隣の富岡町からの避難民を大勢受け入れた

が、原発の水素爆発に伴い、3月16日に全村避難を決定した。そんな中、いったんは避難したもののまた村に戻ってきた村民がひと握りいて、秋元夫妻もその中の1組だった。川内村は、風向きのおかげで当時から空間線量が低く、電気もガスも水もすべて使えていたため、日常生活には差しさわりがなかったという。とはいえ当時はいづどのようなかわからない不安と危険が隣り合わせの状態は、心理的には相当追いつめられる毎日だったと思う。

秋元家は14代も続く旧家で、美誉さん自身も村会議員を務めたことがある。農家としても積極的で、世間で注目されるだいぶ前から無農薬に切り替え、合鴨農法で田んぼを作り、子どもたちに田植え体験をさせたり、都会の人向けにアグリツーリズムを主催したりと、行きたくなる農村、楽しくなる農文化を発信していた。皇室献上米に選ばれたこともあり、献上する年には、昔ながらの伝統的衣装と農法で田植えや稲刈りをしたことを、それは楽しそうに語ってくれた。

震災のときは、美誉さんは避難区域でただ一人、イネの作付けを行った。「おら農業だから、農業だから何もできないし、農業は農業で生きていくほかないし、生

業だから、自分で（米を育てて放射線量検査を）行っただけ。特別なことをしたわけではない」という美誉さんだが、これがいかに特別だったか、それは国があつたとき、避難区域や避難準備区域でのイネの作付けを禁止したことからもわかる。放射線汚染によって自分の田畑がこれから何年も作付けできない状態なのか否か、実際に自分でイネや野菜を育てて調べる、という美誉さんの姿勢は、当たり前のようで途方もない勇気を有する行為だった。誰もいなくなった村では、放置された田畑で雑草が背の高さほどに生い茂り、美誉さんの田んぼだけが水が張られていたという。その情景を思うだけで悲壮感を感じる。

そして収穫の秋。計画通り検査へ回すが、実は収穫の前に国から「検査用以外の米は廃棄せよ」という通知が出された。美誉さんはそれに従うわけだが、廃棄するとわかっていながら一粒も落とさずにきれいに収穫したという。そして「米に申し訳ない」と言いながら、田んぼに収穫したばかりの米を戻して廃棄したそう。肝心の検査結果は、放射性物質の「検出なし」。無農薬有機栽培を行ってきたことが幸いしたのかもしれない。いずれにせよこの検査結果が動かぬ証拠となり、川内村の復興が始まったと言っても過言では

ない。2012年1月に帰村宣言、4月から役場再開。今では川内村には8割の人口が戻り、田んぼは美しく光輝き、カエルの鳴き声がこだまするのどかな田園風景が広がっている。ここまで復興ができたのも、最初の一步を自己責任で踏み出した美誉さんの功績が大きいはずだ。いつでも先駆者はボロボロになりながら後進へ道を切り開くのだ。

先祖から子孫へ

秋元家にはソノ子さんが長年にわたって伝統行事のしきたりや料理のレシピを書き留めたノートがある。大熊町からお嫁にきたソノ子さんは、川内村そして秋元家に伝わる習わしや料理を長い年月をかけて姑らから教わり、いつからかノートに記録として書き残すようになった。時代の流れとともに、昔ながらの習わしを人々がしなくなってきたことに対する危機感と、自分の子どもや孫には受け継いでほしいという願いからだ。「ここで終わりじゃないんですよ、（先祖から孫へ）ずっとつながってるんです」と満面の笑みで言うソノ子さん。そこにあるのは先祖や孫への深い愛情であり、長い長い命のつながりの中の、ほんのひとつながりの自分、という立ち位置を生き抜く

覚悟だと感じた。根差した地域と、先祖から子孫までの家族への惜しみない愛情がこのご夫婦からにじみ出ていて、私は感動して時に涙が出るほどだった。

田畑に関しても、先祖から受け継いだ大地を自分たちの代で台なしにしてはいけないという思いがあったのだと思う。戦争やら冷害やらで、先祖も苦勞をしたはずだ。自分たちの代で原発事故ということが起こったが、今まで何百年も受け継がれたこの土地の歴史を思えば、乗り越えられないわけはないし、乗り越えてしっかり子へ孫へこの土地を受け継いでいきたい、という思い。それは土地への執着ではなく愛着であり、自分たちの生業を支えてくれてきた田畑への感謝の表れだと感じた。大きな時間の流れ、そして広大な土地の上で、根っこをしっかり持って生きるということはこのことなのではないかとしみじみ思う。東京で暮らしているという、そういう大きな命の中のひとつなぎである自分、ということとを忘れがちになる。自分の前に生きた人たち、自分の後に生きる人たち、そのつながりを忘れずにいることが、実は目に見えない大きな力となって人生を支えてくれるのかもしれない。

韓国人が復興映画？

『一陽来復』は私の初監督作品だが、監督なのだと強く実感したのは、実は制作ではなく宣伝公開のときだった。そして私が在日韓国人であることに初めて関心をもたれたのもそのときだった。

それまでは映画公開の際は、プロデューサーとして裏方を仕切ってきたが、今度は自分が前に出て話したり取材を受けたり撮影に応じたりしなくてはならない。40余年生きてきてこれほど人前で話し、写真を撮られることはなかった。ただ幸いなことに、今回は裏方も今までどおりこなしていたので、舞台挨拶や取材を受ける前も忙しすぎてほとんど準備ゼロで出ていたため、緊張をする余裕がないのが逆によかった。おかげで秋篠宮同妃両殿下並びに眞子内親王殿下がご鑑賞されたときも、舞台挨拶ではなぜか一つも緊張せずに話すことができた。

公開時は観客の皆さんに直接挨拶する機会も多く、その中で「韓国人のあなたが日本の東北の復興を撮ってくれてありがとう」と涙される人がいた。取材のときも「在日韓国人としてのアイデンティティがこの映画制作にどう影響しましたか？」と質問されることも多かった。中には

「在日1世の祖父母が日本で生きてきた困難を東北の被災者に重ねていた」などと想像力豊かな仮原稿を送ってきた記者もいたが、実際に私が答えたのは「特に自分では在日韓国人ということは意識していません」というもの。もしかしたら、私は社会の中では「マイノリティ」に属する、という事実が私の無意識に影響している可能性は否めないが、あの東北の震災に接したときに、何人（なにじん）であるということは何の関係もない。同じ人間であること以外何が必要だろうか。

そもそも私はもう今の時代、在日韓国人を「日本人と異なる人々」と特別視すること自体が時代遅れだと思っている。日本社会もいろいろなルーツを持つ人々で構成されている、ということ当たり前のこととして受け止めてほしい。在日韓国人も、1世や2世が生きた時代とはもう違うのだから、日本名ではなく自分の本来の名前をごく当たり前に使えるような社会になってほしいと願う。そうすることで徐々に日本社会も実際はこれほど多民族社会であることが自ずと理解されるのではないだろうか。それによって今より精神的に豊かな社会になるに違いないと信じる。

在日韓国人であることより、私はむしろ

る長野県で生まれ育ったことが東北への深い愛着につながったように思う。特に福島県川内村は風土や食文化が似ていてすぐになじむことができた。山に囲まれ冬寒い川内村は信州に似て本当にのどかな里山だった。大きなお店がなくて信号すら2基しかない川内村の田園風景は、誰が見ても「心のふるさと」と感じるのではないかというほど心底美しく、魂が癒されるような気がする。『一陽来復』には私の川内村愛も存分に映像に現れているはずだ。

韓国での劇場公開

『一陽来復』は幸運にも韓国で劇場公開されることになった。日本公開から1年後の2019年3月14日公開で、『HUI YODA (ポムン オンダ)』という「春は、来る」という意味のタイトルがつけられた。配給会社はCGVアートハウス。日本でも小さな配給会社しかつかなかった映画が、韓国で大手の配給会社がついたのは、とある一人の日本人女性の強い思いのおかげだ。その方は東京在住で英日同時通訳を本職とされており、『一陽来復』の出演者である石巻の遠藤さんご夫妻を長く支援している。映画を観て感動し、韓国の知り合いに熱心にお

話してくださったことがきっかけとなった。一人の人間の強い信念が、どんなセールスエージェントもできないことを成し遂げた。プロが動くのには勘定が必要だが、素人は思いだけで動く。だから純粹で強い。

韓国での劇場公開を経験するのは初めてのこと、日本の商流との違いに驚くことが多かった。最大の違いは、公開日が直前まで決まらないことだった。日本ではまず初期の段階で公開日のあたりをつけて、そこをゴール地点として宣伝計画を立てる。ポスターやチラシ、予告編を作り、試写会を開催し、取材を入れて、公開日の2〜3週間前から公開日までが露出のピークを迎えるよう数か月〜半年間の計画を立てて実行していく。

これに対して韓国は、ライバルを意識して公開日をギリギリまで伏せるそう。公開月はある程度内々に決めてはいても、日付がわかったのは『一陽来復』の場合はおおよそ1か月前だった。そこからさらに驚いたのは、上映スケジュールはなんと前日にならないと出なかった。日本では前週の水曜くらいには次の1週間のスケジュールが出る。こんなギリギリのスケジュールなのに、韓国では平日昼間から映画館に人が多い。聞いてみると、ど

うやら高齢の方々も皆スケジュールはサクサクとスマホで調べるらしい。今日行きたい！と思ったら調べて行く。映画は喫茶店にいくような感覚で友達皆と出かけるらしい。あらかじめ計画して映画を観に行く日本人との違いがこんなところにも表れていた。

ドキュメンタリー映画、しかも震災を扱った映画は日本ですら「重い」や悲しいのは嫌だ」と敬遠される傾向があった。ましてや韓国では外国である日本映画で、無名の監督と出演者。しっかり告知しないと誰も知らないうちに公開が終わってしまうことだってあり得る。しかし配給会社の見解は厳しく、「韓国では福島（の原発被害）に対する国民感情が悪いので宣伝活動はしない」というものだった。下手に宣伝をして叩かれて逆効果になる可能性を考慮してのことだと思う。そんな状況ならなおさらしっかり伝えることが必要なのではないかと私は悲しいやら悔しいやらで、一人で動くことに決めた。周りの日本人の友人に呼びかけたら、あっという間にいろいろな方が紹介してくれていくつかの媒体のインタビューが決まり、13年ぶりにソウルに行くことになった。最終的には大手新聞を含め7〜8媒体の事前取材をうけることになり、

公開期間にかけていくつもの記事が出た。多くの日本人・韓国人が無償で協力してくれたのだが、その思いは東日本大震災の復興へ力を貸したい、ということだったと思う。

ヘイトの構造

韓国では東日本大震災以降、震災といえば福島原発の放射線被害の報道が多く、中には明らかにデマとわかるようなことまでネット上で流布していた。現実の福島では、立入禁止区域は別として、空間線量はもう世界の他の都市と比べても決して高くないことを私は知っていたので、きちんとデータを見せて話せばわかってもらえるだろう、と考えていた。しかし震災後8年間にわたりマスコミやネットによる刷り込みによってつくられた国民感情というものは、そんな簡単に変わるようなものではなかった。データは信ぴょう性が問われ、日本政府は元より信用がないし、また長期間にわたる低線量被曝については世界的にも信頼に値するデータがない、とされてしまう。東京以北はいまだに被曝の危険があるから行かない方がいいとさえ言われている。福島の人々の顔が浮かんできて、私は涙が出るほど悔しかった。しかし時間が経って落ち着いてみる

と、これは日本で嫌韓を叫ぶ人々と同じ思考構造ではないかと思った。

韓国の福島風評被害と、日本の韓国ヘイトが似ているのは、原因がまず無知にあること。正しい情報とデマを見極められず、デマを信じ切っている。次に長年にわたる繰り返し刷り込み。嘘でも何回も何年も語られると本当になってしまいう危うさ。最後に、顔が見える関係性がないこと。韓国に友達がいる、福島に友達がいる、という個人的に顔の見える関係がないと、集団化したイメージだけでとらえてしまう。だから得体の知れない集団や物事に対する恐怖心や嫌悪が煽られる。結果として行ったことも見たこともなく親しい知り合いもないのに、ネットで繰り返し流れてくるデマを信じ込んでそれに基づいて発言や行動をしてしまう。嘆かわしい。福島風評被害について私個人が今できることはだから、現地からの情報を発信し続けることだと思う。私が愛してやまない福島県の方々がこれ以上傷つくことがないように、小さな一歩を歩み続けなくてはならない。

日本大使館の協力

韓国公開で思いがけない展開だったのは、ソウルの日本大使館による全面的な

協力だった。公開日まで日数がなく焦っていた私は、日本大使館にもぜひ告知をお願いしたいと面会を申し込んだ。公報文化院の西岡達史院長が直々に会ってくださり、サンプルDVDを見てこれはずいぶん多くの韓国の人に見てほしいと思うので協力したいというありがたい申し出をいただいた。そこからは院長以下公報文化院や大使館の皆さんおよび本国外務省の方々の懸命な働きによって、なんと日本大使館主催による上映会とレセプションがソウルの映画館で実施されることがあっという間に決まった。韓国での福島風評被害に大使館も頭を悩ませていたようで、『一陽来復』には福島原発の放射線被害以外の東北の日常が描かれていた点が評価されたようだ。

上映には石巻の遠藤伸一さん綾子さん夫妻と私を日本から招いていただき、長嶺安政大使の挨拶が始まったイベントは、ソウルの日韓親善関係者で満席となり、ある種の熱気に包まれた。日韓の多くのメディアも取材に訪れてくれた。私たちが今回の映画を通じて伝えたかったことは、傷ついた人生と心の回復であり、遠藤夫妻の存在そのものが韓国の方にも大きな光を与えてくれたように思う。人が痛みを抱えて生きることの厳しさと貴さ

が、お2人の言葉を通じて、存在を通じて、伝えられた。人間の痛みを共有するのにも国も文化も関係ないし、逆にそういう違いを乗り越えて痛みをともに感じる事ができるかどうか、このグローバルな時代に問われている人間としての資質であると感じる。

在日韓国人について

私は今回の映画のおかげで、初めて観光以外で韓国を訪問し、多くの韓国人の方々と直接話す機会に恵まれたが、韓国では在日韓国人がどういうものか、今一つ理解されていないのかもしれない。私が日本で生まれ育ち韓国語を話さないが韓国籍を持っていることは、少なからず驚かれた。在日韓国人の多くが私と同じで日本語が母語であり韓国語は話せない人が多い。私は韓国には愛着があるが、言葉の切れ目が縁の切れ目なのか、多くの在日、特に3世以降は韓国よりも日本寄りで日本国籍に帰化する人々も多い。現実的に考えて仕方ないことだと思う。ただ国籍というのは行政上のラベルに過ぎず、それは個人のアイデンティティや文化とは違う次元のものである、ということを私は大学時代1年間過ごしたカナダで学んだ。多民族国家のカナダでは

国籍も出身国も文化も言葉も全部違って誰も驚かない。だから国籍などというものは、生活がより快適になるよう自由に選択すればよいと思うようになった。日本では帰化手続きに大変な手間とお金がかかるので皆一大決心をするのだと思うが、そもそも国籍というのは為政者のために存在するようなものであって、自分が何者かを決めるものではないと常々思っている。

おわりに

この映画が今この時期に韓国で公開されることにどんな意味があるのだろうか、と私は自分に問いながらソウルで本作を鑑賞したが、そんなときに響いてきた言葉がある。出演者の一人、宮城県南三陸町で農漁業を営む後藤一磨さんが映画の中で話していた、「私達は順調なうちには反省もしないし、悪いことをしていてもそのことが悪いことだと気がつかない。でも（震災のような）大きな変化があると、気づかざるを得ない。そのとき何に気づくかが大切」というくだり。今日韓国関係が悪化しているとすれば、何が悪いのか気がつくチャンスということでもある。私たちは今何に気づき、どうするべきなのか。日本人韓国人両方の力量が問

われているはずだ。あの東北大震災を経験した東北の方々はあらゆる意味で私たちの先人だと思う。私たちはこの体験を共有させてもらうことで、貴重な学びを続けることができるだろう。

(2018年10月4日・公開フォーラム)

筆者略歴(ユンミヤ)

1975年生まれ。長野県佐久市出身。津田塾大学国際関係学科卒。大学時代にカナダ留学。卒業後はインドのタゴール国際大学でデザインを勉強。帰国後IT企業の広報担当後、映画の世界へ入り、日米合作映画で日本とアメリカを往復してプリプロダクションを担う。NHKのドキュメンタリー番組の制作に参加後、2010年から平成プロジェクトに参加して、制作プロデューサーに。監督作品は今回が初となる。主な作品に、映画『李藝—最初の朝鮮通信使』『サンマとカタル 女川つながる人々』は制作プロデューサー、『シネマの天使』『こいのわ 婚活クルージング』はプロデューサー、などがある。